

つながりの「結びなおし」としての災害復興 受け入れ地域住民の“揺れる感情”に注目して

山崎真帆（一橋大学大学院社会学研究科）

本報告は、東日本大震災の被災地域住民における災害・復興経験の諸相について、特に、受け入れ地域における避難者・移住者との間に関係性を構築しようとする取り組みに焦点をあて、文化人類学的な見地から検討を加えることを目的とする。

東日本大震災発生後、その被害の甚大さや原子力発電所事故による影響等から避難者の所在は全都道府県に及び、また復興の遅れもあって、多くの被災者が他地への移住を選択した。一方受け入れ地域では、地方行政や地域住民、特定非営利活動法人等の手により、避難者や移住者を受け入れるための様々な取り組みが展開された。このような事態を受け、近年は避難や移住という行為に伴い生起する多様な事象が、多面的に論じられてきている。こうした調査・研究が主に県外など遠隔地への広域避難を対象とする一方、本報告では、これまで十分に検討されてこなかった、津波被災自治体内の山間部という、津波避難者が発生した地域と深い関係を有する近隣地域を対象として設定する。まずはこれらの地域が多くの津波避難者・移住者を受け入れていたことを明らかにしたうえで、同地域住民における災害・復興経験の一端としての受け入れ実践の諸相を考察する。特に、そこで見られた受け入れ地域住民の感情の“揺れ”に言及してその背景にある地域的文脈を探り、このような実践を「つながりの結びなおし」と言い表すことを提案する。

人文・社会科学における災害研究は長きにわたり周辺の分野であったが、20世紀後半以降、人類学者アンソニー・オリヴァー＝スミスらの働き（たとえば、ホフマン・オリヴァー＝スミス 2006）で災害が単なる「自然」による破壊ではなく、「社会的」な現象であるとの認識が共有されるようになると研究の蓄積が進み、そこからの復興過程に関しても注目が高まった。人類学においては、周期的な災害に対するローカルな「災害観」や伝統的な対応手法である「災害文化」、災害の社会的要因としての「社会やコミュニティの脆弱性」などといったトピックを中心的に扱ってきた。

他方、近年複数の大災害を経験し、上記で触れたように避難の広域化・長期化が指摘される日本においては、点在する仮設住宅への入居やそこでの長期にわたる避難生活などが引き起こす「コミュニティの崩壊」「つながりの喪失」等と称される現象が注目を集めている。災害復興は自治体やコミュニティ、個人といった様々なレベルにおいて、多様な出来事が重層的・同時並行的に進行する複合的な現象であるが、近年は上

記との関連で、避難先から帰還した後の「コミュニティの再生・構築」、「つながりの回復」などといった局面に関する調査・研究が多分野において蓄積されてきた。人類学的見地からも関連する研究が取り組まれているが、災害に伴う「コミュニティ（あるいはつながり）の崩壊と再生」というシンプルな図式に疑問を投げかけるような論点も提示されてきている。本報告においても、津波被災地域とその近隣地域を取り上げることで、従前の「つながり」が災害とそこからの復興過程において、どう「以前とは違うものとして」新しく「結びなおされてきつつあるのか」といった議論を展開していきたい。

本報告で取り上げるのは、宮城県北東部に位置し、2011年の津波で沿岸地域が甚大な被害を被った本吉郡南三陸町の山間地域である。同地域には、発災直後より町内沿岸地域から多くの津波避難者が押し寄せ、地域住民は支援物資の配布や炊き出しの実施に奔走した。その後仮設住宅が建設されると地域住民による訪問支援が開始されるが、仮設入居者に対し「なんとか元気づけたい」という思いが語られる一方で、同じ女性から「彼らは怠け者になりつつある」という批判もなされた。また災害公営住宅が建設され津波被災者の入居が始まると、彼らに「早く地域になじんでもらいたい」と交流会を企画・運営する住民から、「彼らの暮らしは私たちのものとは違う。拒むわけではないが、当面、向こうは向こうで暮らしてもらい、こちらは今まで通りで」という声も聞かれた。なぜこのように、受け入れ地域住民の感情は「揺れる」のだろうか。

以上を踏まえ、本報告では以下の2点を検討課題とする。第一に、本報告で取り上げる山間地域の住民と津波避難者が発生した地域の住民の間に、東日本大震災発災以前の段階までに構築されてきた「つながり」のあり方を歴史的・文化的コンテキストに言及しながら明らかにする。災害による避難者・移住者受け入れの過程で改変されることとなった「つながり」とは、いったいどのようなものであったのか。第二に、発災後の避難や移住といった移動過程のなかで、受け入れ地域住民はどのような実践においてつながりの「結びなおし」に取り組んでいたのか、その諸相を考察する。特に、受け入れ地域住民が表出した感情と従来の「つながり」との関係、そして感情の「結びなおし」実践への影響を明らかにする。

参考文献

スザンナ・M・ホフマン／アンソニー・オリヴァー＝スミス、若林佳史訳、2006、『災害の人類学』明石書店。

キーワード 災害、東日本大震災、つながり、感情、受け入れ地域